

編集後記



共同編集長・工学部2年

木野凱平

行政区ずかんの始動から数えて4年の月日が経過しましたが、その長期にわたる活動にご理解いただいた行政区長を筆頭とする村民の皆様の暖かさには感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

飯舘村には一昨年の夏に初めて訪れてから、かれこれ2年ほどが経ちました。2年経つと変化が現れるもので、訪れるたびに飯舘村が少しずつ変わっていく姿を見ながら、今を記録することの尊さを改めて学ばせていただきました。景色が塗り替わっていく中で、私たちが書き留めた言葉や写真が、いつか未来の村民の皆様にとって、大切な記憶を辿る一助になることを願ってやみません。この本には、私たちの見た飯舘村の中にあるコミュニティのあり方が詰まっています。

この行政区ずかんの制作は、私たちにとっても非常に実りあるものでした。取材を通して、村や行政区に対する皆様の等身大の思いを聞くことができ、心揺さぶられる瞬間が多くありました。この経験は私にとってかけがえのない財産であり、私の人生観に大きな影響を与えてくれました。このずかんを読んだ皆様が、村の方々の等身大の思いを感じ、何かを受け取っていただければ幸いです。



共同編集長・工学部3年

田端丈一郎

2年ほどの時間をかけて村を知り、伝える一連の作業は、とても貴重な経験となりました。

取材後に地域を訪れ、写真を撮りながら聞き出したことを思い出し、その地の過去と将来の姿を思い描く時間は、そこで歴史を重ねてきたすべての人々とここを偶然訪れることとなった自分とが出会うような不思議な気持ちになる、特別な時間でした。

本書が、村民の皆さまが往時を思い出し、また新たに村を訪れる皆さまが私のように村の風土に思いを馳せるきっかけとなれば幸いです。

2024年発行の「行政区ずかん」の続編となる本編の制作は、先輩方の築いた手法を倣いながら、次第にその意義や先輩方の意図をつかんでいくものでした。人文学に疎い私に務まるのだろうかと不安がありましたが、なんとか完結にこぎつけることができました。

本紙を企画し、全2編に通ずる制作思想と方法の礎をゼロから築き上げられた第1編編集部の皆さまに、心より敬意を表します。



農学部 2 年

上野元輝

「復興」や「被災地」。飯舘村を語るとき、どうしてもそんな大きな言葉が先行してしまいがちです。しかし、僕がこの村に通い、行政区長の方々と膝を突き合わせてお話を聞く中で出会ったのは、そんな硬い言葉では到底括れない、一人ひとりの温かい「暮らし」と「想い」でした。

「この桜が綺麗なんだ」「昔はここでこんな祭りをしてな」ずかんを作るための取材のはずが、いつの間にか僕たちは、おじいちゃんやおばあちゃんの昔話に聞き入る孫のような顔をしていた気がします。厳しい現実と向き合いながらも、故郷を愛し、守り続ける区長さんたちの言葉には、土地に根ざした皆さんだけが持つ、静かで力強い熱がありました。

本紙が今や昔のそんな温かさを残し伝えられるものであれば幸いです。

取材に応じてくださった行政区長の皆様、そして温かく迎え入れてくださった飯舘村の皆様に、心からの感謝を込めて。



法学部 3 年

坂口空翠

村の文化や歴史を後世に残すこと。これが本取材の目的でしたが、区長のみなさんとお会いし、お話しする中で、そうした文化や風土は、その方の人生や生き方に離れがたく結びついていることが伝わってきました。文化を知ることは、その人を知ることと一体であったと思います。素敵なお話を伺えたことは、私の人生においても貴重な体験になりました。